

# 全国自問教育の会



EOSA Education of Self-Asking

発行日： 2012（平成24）年 3月31日 No.2

発行者： 全国自問教育の会（会長：小島信由）

編集： 自問教育の会事務局（斉藤 丸山 片岡 平田）

事務局： 斉藤辰幸（長野県竜東中学校）

E-mail： hirata@poplar.ocn.ne.jp

## 第20回 全国自問教育の会記録

テーマ： 自分の心に問いながら自ら行動する生徒の育成  
平成23年10月28・29日 長野県飯田市立竜東中学校

	1:15	1:35	1:50	2:00	2:50	3:10	3:30	5:30	6:30
28日(金)	受付	清掃 参観		公開授業		開 会 行 事	授業研究会 実践交流会 I	移 動	情報交換会
29日(土)	8:40	9:00		12:00	1:00		3:00	3:15	
	受付		実践交流会 II		昼 食		実践交流会 III	閉 会 行 事	

### 公開授業（道徳）

主題名： 「感謝の心を持って働く喜び」  
授業者： 宮島利佳教諭  
授業学級： 3学年  
ねらい： 感謝の気持ちを言葉や行動で表現することのよさや大切さに気付いた生徒たちが、資料や話し合いを通して、感謝の気持ちをもって働くことで充実感や働く喜びを味わえることを知る。



## 【授業研究会参加者の声】

- ・生徒の素直さが前面に出たすばらしい授業であった。また、教師と生徒の心の距離も近く、とてもあたたかい雰囲気で大変うらやましく感じました。
- 生徒達がよく聞き、よく発表するなあと本当にびっくりしました。
- ・先生自身も自分のことをよく語り、普段から先生と生徒が素で向き合っているように感じました。とてもすばらしかったです。
- ・子どもと担任の先生との関係、そこから作り出される空気感がとてもよかったです。それまでの関係を築く先生の指導の跡を感じました。
- ・同い年の先生が授業者だとお聞きし、刺激になりました。
- ・生徒達が安心して自分の意見を述べるができる、開かれた雰囲気がある教室ですね。
- ・感謝の気持ちを行動に移すときの気恥ずかしさやうれしさ、満足感など、だれもが感じるような気持ちを、温かい思いとしてクラス全体で共有共感されている授業だったように感じました。
- ・多くの人の前で感謝の心をあれほど素直に表現できるということに、すばらしさを感じました。
- ・心温まる涙が出るような授業でした。15分間の心磨きの時間だけではなく、日々の生活全てがおそらく「自問」にもとづいているクラス、学校なのだと感じました。
- ・教室全体の温かい空気感と先生と生徒さんの距離に感動し、道徳という時間が心地よいものに感じられました。

## 【鎌倉正之先生（本会理事）の講評】

竹内先生は、「はい、はい」と声高に主張しあうのは、話し合いではないとおっしゃった。その意味で、自問教育に相応しいレベルの高い授業研究会ができた。

授業は、生徒と先生の血の通った交流の姿、小規模校でありながら堂々と胸を張って明確に自分の意見を発表している生徒の姿が印象的であった。

竹内先生は、感謝の気持ちが起こらなかつたら、掃除を休んでいまいしょうとしたが、これは大変なこと。たとえ全員が掃除を休んでも、先生は我慢しなきゃあいけない。それほど子供の自発性に信頼をかけ通すと

いうことである。

自らに問う掃除というが、第3段階までは、目が外に向かっているから、本当の意味での自問ではない。第4段階(感謝清掃)に至って初めて目は自分の内面に向かっていく。私も現職時代に感謝清掃に挑戦した。小学3年生に「毎日使わせてくれてありがとう」と念仏のように唱えさせて、竹内先生から大笑いされてしまった。

この難しい「感謝清掃」に果敢に挑戦された竜東中学校の先生方に、心からの敬意を捧げたい。

次に、見返しの授業はどうあるべきかについて考えたい。キーワードとして、「広げる」「味わう」「深める」をあげたい。これで本時を見たとき、生徒相互、生徒と教師の共感の姿は見事であった。「味わう」「深める」は到達できたと考えられる。一方、サッカーの資料がクラスの実態、適時性から見て適切であったかどうかは、「広げる」という観点から授業分析していく必要があるだろう。

最後に自問は実践されなければ意味がない。だから、竹内先生は自問活動と銘打ったのであった。又、ここが文科省道徳との決定的な違いでもある。本時のように自らを振り返る授業をしたことで、新たな思いを持って自問清掃に取り組めるようになるかどうか。そのためには、理屈でわかったを突き抜けて、腹の底にずしんと感ずる感性的な理解に至らなければならない。教師の指導力（説得力）が問われるところである。

自問清掃による精神性の向上は、《行為→説得の授業→行為→見返しの授業→行為》の繰り返しのよって螺旋的に成長していくのではないだろうか。



# 実践交流会

## 【発表内容の概略】

### 1. 「自発的な子を育てる特別活動の創意工夫」：津田将宏(尾張旭市旭中学校)

自問清掃を理解できたりできなくなったりして、心が揺れている生徒Aの変容を通して、自問教育の成果と課題を明らかにした。自問オリエンテーション、自問集会、また有志生徒による自問委員会などの取り組みを通して、A生が自問活動への意識を高めながら自発性を発露させつつある様子がうかがえる。一方で、なかなか自問活動の意義を理解できない生徒への対応や全校体制で取り組んでいない問題点(掃除中に音楽が流れている)など課題も多く、今後の研究の深まりが期待されている。

### 2. 講話「震災と日本と教育」：山本健治

東日本大震災の被災地を見て歩き、また、ボランティア活動をして考えたこと、感じたこと・・・日本は自然災害列島。中国人観光客が一斉に日本から引き揚げた理由と関東大震災の関連、忍び寄るファシズム。学校は「命を守る場」、「命の守り方」を教えるところだが、企業と学校の防災対策の違いがある。ボランティアは日常の自立的・主体的連帯精神の教育と活動から育ち、日頃から助け合いの精神を学び、実践していなければいざというとき動かない。

### 3. 「竹内隆夫と井島美学」：平田治(信州大学教育学部大学院)

竹内隆夫著「自らを高める自問教育の手引き」には、「・・・私がこのプランを立てるに当たってその根拠を、美学及び脳生理学に求めた・・・」とある。しかし、脳生理学に関わる部分についての説明はなされているが、美学に関わる説明がどこにもない。自問教育と美学とのつながりについて、私たちは追究する必要があるのではないだろうか。

### 4. 「自問教育は自己教育—そして自己は世界につながる—」：関明夫(長野県教育を拓く会)

他者に学びながら自己教育に生きる子を育てよう。この結論に至るまでには長い道のりと決断があった。改革そのものはある程度は仕方がないが、問題は、校長も教師も外ばかり見たり変化の表面ばかりに気をとられて、物事の本質や奥にあるものを見失いやすいこと。その中で、もっとも憂慮しなければならないことは、子どもの真の姿を見つめ、どんな教育をすることが一番いいことかを真剣に考えることでしょう。

### 5. 「自問清掃と学級経営」：八島重綱・陣内美紀(佐賀県武雄中学校)

自問清掃に取り組んで5年目。学級経営と自問清掃をつなぐようにしている。自問ノートによって、自分の弱い部分を見つめるようになり、それと向き合い、前向きにどうにかしようとする姿が見られる。また、他者の素晴らしさにも気づき、暖かみのある人間関係が形成されている。進路決定の上でも大きな役割を果たしている。

### 6. 「自問清掃で我慢することを身につける」：大廣紘巳(山口県和木中学校)

生徒指導困難校での実践。今年度から。問題行動の大半が我慢する耐性の乏しさからだと考えた。第一段階を重点的に取り組んでいる。成果として、清掃時間中の私語が大幅に減る、学校がきれいになる、問題行動半減(分析がさらに必要だが)、「授業2分前着席・1分前黙想」がほぼできるようになった。一方、移動時の私語、心磨きへの意識が不十分な生徒、教師の取り組みに温度差が見られる等の課題がある。

### 7. 「竹内隆夫の自問教育実践における児童生徒の内発性と指導の科学性」：土井進(信州大学教育学部教授)

平成5年度後期授業「教育実践研究の基礎」に竹内先生をお招きし、講義「若い教師の悩み、教師の基礎基本(その1から4)」を受けた。その全講義内容をノートに記録したので報告した。

人間教育と知能指数は一致しない。「掃除」を実践活動の場としたのは、毎日やっていること、友達同士が錯綜→人間関係が生じている→人間が高まる教育の場に。感謝の気持ちを教育する。これは本人にはできな

い。母親を尊敬する教育は、父の仕事。別の大人にしかできない。日本の子が最も欠けているのは、感謝の心。戦後、感謝の心を育て忘れた。

心の物差しに信頼をかけきる・・・意味が深い。一人ひとりが胸に羅針盤をもつ。

道徳教育では、教師は子どもより上にいる言い方をしてはならない。上から下へ向かって叱る資格なし。教科の指導では、下に言う言い方はできる。道徳と教科の使い分け。(以上、講義記録からの紹介)

-100×-1 は、マイナスにマイナスを掛けるとプラスが生ずる。この-1が見えるかどうか。第4段階で「休んでもよい」とするのは、-1を掛けることである。それを自問と呼んだ。

#### 8. 「自問清掃の取り組み～日々自分自身と向き合い、心を磨こうとする子どもたち～」:長野県北相木小学校の先生方

自分から進んで行動できない、言われないとできない・・・そんな子供たちの実態から2009年スタート。2010年から「魔法の掃除 Part2」となった。Part2とは、分担箇所という枠の撤廃。「分担場所を自由にしようか?」というテーマでの自問集会。白熱した議論に。自分の意志で動いているからこそ出てくる意見ばかりであった。

北村教諭は、今までの学級通信から子ども達の変容を追った。視野が広まり、掃除で学んだことを掃除以外でも生かそうとする姿などが見られるようになってきた。

山浦教諭は、トイレ掃除をやり続けたAさんを通して、担任の変容、Aさんのとらえ直し、自問清掃をきっかけとした授業改善への取り組みへとつながった。

#### 9. 「自らを問いながら、子どもとともに歩む清掃活動」:片岡聡矢(長野県高島小学校)

教師が苦手意識を持ってしまう子どもTくんとの関わりを通して、教師自身のあり方を問い返した。Tくんと向き合うことは自分自身と向き合うこと。自問清掃との出会いによって、自問することの意味を感じ始めている。まだ、暗闇だが、一歩ずつ歩んでいく勇気を自問清掃からもらっている。

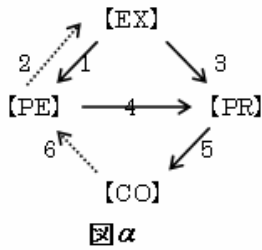
#### 10. 「自問掃除の取り組み」:日吉慎一(千葉県白井第三小学校)

一般的に、掃除の振り返りを続けることによって、自分の行為や仲間との関わりを振り返る習慣が身に付く。この習慣が掃除以外の生活にも波及していく。個々までは、多くの子どもに少なからず身に付いていくものだと思う。しかし、Yさんはこちらの期待以上の進化(深化)を見せている。なぜか。Yさんがもともと持っている潜在能力が開花したと今も8割方そう思っている。しかし、1年半ぶりに自問ノートを読み返してみると、宿題プリントに書き綴っていた文章とどこか似ているように感じた。自問の取り組みを発展させるには、教師の考えや想いを伝え続けていくことが一つの糧になるのではないか。

#### 11. 「ある自問清掃実践者の自己省察」:平田治(信州大学教育学部大学院)

担任であるH教諭(\*\*県小学校勤務)自身が毎日書いていた「自問ノート(日記)」と「作文」を分析し、「自問清掃」における教師成長を実証した。

5年生の11月から卒業するまでの133日間の「自問ノート(日記)」記述を、「構文代入法・言葉置換法」、カテゴリー化による分類、「教師の職能成長相互連関モデル(The interconnected, non-linear structural model of teacher professional growth)」を適応して分析した結果、【外的情報 EX】【実践化 PC】【子どもの結果 CO】【教師の教育観 PE】の4領域間において相互関連性が確認された。また、H教諭の作文『自問教育に出会うまで』についても、同モデルを適応して分析した結果、H教諭は単に新たな教育観や方法を知って、そのままそれを受け容れることで「変わった」のではなく、自分なりの解釈や工夫を加えながら実践し、結果として現れた子どもの姿などから、不明確であった考えが明確なものとして「確立してきた」のだと判断していることが明らかになった。作文の記述は、「自問清掃」と「出会う前は、自分の生活スタイルの延長で「気づき考える」教育を何となく行ってきたものが、本〔平田(2005)〕に出会い(以下図αの矢印1、2)、段階を追った指導法を知り(矢印3、4)、子どもの成長を目の当たりにすることで(矢印5)揺るがぬ自信を持つことができた(矢印6)」と図示される。これは、新しい情報として



図α

得た外的資源である「自問清掃」を修正的導入し、実践と省察の往還の中から子どもに顕現した結果を、子どもの成長と捉えて自らの教育観を自己省察して自覚化するという一連の相互連関作用である。教師の教育観が半自覚的な状態から自覚的なものへと向上的に変容したことを意味しており、別言すれば、教師成長を示している。

## 参加者の声

### 自然体の掃除、正直な掃除に感動・感心

フリーライター 山本健治

わたしは月に一度か二度、大阪を中心に「掃除に学ぶ会」が主催する学校のトイレ清掃に参加しています。「くらべない」「ほめない」の原則に反しますが、「自問教育の会」の公開授業の子どもたちとついつくらべてしまいます。いつも感じるのは、あんな真剣に黙々と掃除に取り組む児童・生徒の姿は、どの学校をまわっても見ることはできないということです。

今回の竜東中学校でも、改めてそう感じましたが、とくに強く感じたことは、生徒さんたちの掃除の姿がやわらかかったことです。学校での清掃は、いくら日頃みんながよくやっても、学校教育がいやおうなく持っている建前的な硬さが感じられるものですが、それがありませんでした。まったく自然体で、掃除を自分のものとし、自分の気持ちに正直にやっていると思いました。

授業でも、掃除を通してあれだけ視野を広げて、みんなが生き活きと意見を述べ合っている姿を見ていて、思わず「わたしも参加させてほしい」と言いたくなるほどでした。以前、研究会に参加した大阪のある先生が、掃除が教育になる、掃除であれだけの授業が成立する、子どもらが一生懸命に自分の気持ちで掃除をして、意見を言っている姿を見て、「うらやましい」の一語に尽きると言っていました。ほんとうに、そうです。ありがとうございました。



### 第20回自問教育研究大会に参加して

武雄市立武雄中学校 陣内美紀

初めて自問教育研究大会に参加した。自問教育に関わる先生方は「濃い」と平田先生からうかがっていたが、確かに「濃い」。しかし、「熱い」先生方ばかりであった。どれだけ子どもたちを思い、どれだけ子どもたちの成長を願い、実践しているかということをしひしと感じ、非常に感銘を受けた。

関田夫先生の発表資料の中に、関先生が「もっと自問教育の輪を広げたいものですね。」と平田先生におっしゃったら『「あんな辛いことを他の先生方にやらせる気にはなりませんね」と独りごとのようにひかえめに、しみじみと言われた」という件がある。そして、その事に対して関先生は「自問清掃という方法が、単に方法論に終わらず必然的に教師自身の内面の変革を強く求めているのだと理解して欲しいと思う。つまり『狭き門』なのである」と述べておられる。まさに自問清掃は『狭き門』である。しかし、「狭き門より入れ」(マタイ伝7章13節)とあるように、狭き門こそが「人間としての骨格」(土井進先生)を鍛える道に通じると思う。子どもたちの基礎をつくる義務教育の時期に自問教育と出会えた教師、生徒は幸せである。

最後に、竜東中学校の先生方、子どもたちをはじめ、自問教育研究会事務局の先生方、さらに自問教育に関わっていらっしゃる先生方、みなさん本当に温かく迎えていただき、これが「まごころ」というものなのかと身をもって感じた。自問教育は人間教育である。自問教育を進める先生方のベースが、やはりすばらしい人間性なのだ、ところがじんとあたたかくなった。本当にありがとうございました。



## 「第20回全国自問教育の会」に参加して

山口県玖珂郡和木中学校 大廣 紘巳

昨年視察させていただいた竜東中学校での開催というのもあったか、初めてにも関わらずとてもリラックスして会に参加できました。自問清掃を通して、参加されているすべての方々の「子どもたちをより良くしたい、成長させたい」という強い思いが発表や協議、講話で伝わってきました。また、子どもたちの自らの力で学校をも変えることのできるこの取組に出会えたこと、その実践をされている方々に出会えたこと、発表の機会（半年間の振り返り）をいただいたことをとても幸せに感じました。昨年度自問清掃の導入の検討を始めてから、竜東中や松川中の視察、平田先生による校内研修を経て4月からの実践開始にこぎ着け、ほんの少しですが学校が変わり始めたような気がします。自問清掃を始めたことに安心するのではなく、参会者の方々のように常に前向きで向上心をもってこの実践を続けていき、自問できる子どもを一人でも多く育てていきたいと強く決心しました。



## 西田幾多郎の生誕地から

野々市市立野々市中学校教諭 中島 卓二

生徒615名、教職員48名の本校が自問清掃の全校一斉導入を行って2年目を迎える。細かな課題が山積している中、今回初めて「全国自問教育の会」に参加させていただき、先進校における気概溢れる取り組みのレポート発表や協議から、多くのヒントを得ることができた。

先日の11月11日をもって、人口5万人を超えた私たちの町は単独市制に移行し、「野々市市」として新たなステージを迎えた。日本海側で最も高い人口密度を誇る本市は、その面積規模から、小中連携を始めとしたフットワークの軽さが自慢である。この地における義務教育期間に、意志・情操・創造といった豊かな人間性を育む手だてのひとつとして、この自問清掃を核とした教育活動が本校で実践されていくことは、新たな「市民教育（シティズンシップ教育）」の実現を地で行きつつ、新たに野々市市としての教育カラーを打ち出せる契機となり得る。

故・竹内隆夫先生による理論構築に大きく影響を与えたとされる「禅の思想」。ここから新たな哲学体系を築いた唯一無二の哲学者、西田幾多郎の生誕地・石川県で次年度の全国自問教育の会を主催させていただけることに、少なからずの縁を感じずにはいられない。

## 第21回 全国自問教育の会 予告

石川県野々市市立野々市中学校 2012(平成24)年11月3・4日

### 編集後記

- ・20回目という節目の自問教育の会を竜東中学校で開催させていただいたこと、また、大勢の皆様にご参集いただけたことに心から感謝いたします。公開授業で参観していただいた3年生は、その後4ヶ月間「感謝清掃」に取り組みました。彼ら28名は、しっとりしたそれでいて凛々しいオーラを纏って、先日学舎を巣立っていきました。(斉藤)
- ・毎回そうですが、実践交流会に参加されている皆様の熱い情熱が、今でも鮮明によみがえります。その情熱を思い出しては、毎日くじけそうになる(指示・命令を出したくなる)心を抑え、そして子どもたちを信じぬく決意を新たにしています。(丸山)
- ・自問清掃に出会って3年目の23年度は、隣の学級に新しく赴任した先生と自問清掃について語り合う事も多くなり学年への広がりがありました。まだまだ実践が深まりませんが、日々の実践を続け、全国の実践者と交流を深める事を楽しみにしています。(片岡)
- ・この会報は、当年度2回の発行を予定しています。夏頃に発行する会報では「全国自問教育の会」の予定を、春頃に発行する会報では、その会の様子を報告する予定です。今回は、報告として参加者の声を中心に紹介しました。ところで、3月3・4日に開催された日本教師学会(於：早稲田大学)で、口頭発表『学校掃除と教師の成長—「自問清掃」を事例として—』を行い、ある程度手応えを得ることができました。今年度は、いくつかの学会で発表する予定です。教育学研究において看過されがちであった学校掃除の教育的意義について、研究者達がどのような反応を返してくれるか楽しみです。教育現場で実践を重ねてきた「自問清掃」を初めとする学校掃除教育を、学術的なレベルで認知させていくことが今後の課題です。(平田)